

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：38001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23143

研究課題名(和文) アルゼンチンにおける沖縄移民社会と「復帰運動」 在亜沖縄県人連合会を中心に

研究課題名(英文) Okinawan immigrant society and "reversion movement" in Argentina

研究代表者

月野 楓子 (TSUKINO, Fuko)

沖縄国際大学・総合文化学部・講師

研究者番号：70844710

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第二次世界大戦後のアルゼンチン沖縄移民社会にみられた「祖国復帰」をめぐる運動について、史資料及び聞き取りを通して明らかにするものであった。研究期間を通して得られた成果は主に以下の3点である。

1. 復帰をめぐる運動に至るまでの沖縄移民社会における組織形成の過程について整理を進めた。2. 『らぶらた報知』を中心とする新聞資料の収集及びアルゼンチン以外の沖縄移民社会について記述された資料の収集を進めた。3. 沖縄において新規の聞き取りを行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、アルゼンチンの沖縄移民社会で展開された「祖国復帰」を目指す運動を対象とした。同国における復帰運動に関する記述は、移民史等の刊行史資料を除いてはみられなかった。

研究成果の学術的意義としては、ハワイやブラジルと比較して扱われることの少なかったアルゼンチンの沖縄移民社会に焦点をあて、とりわけ復帰運動に向かう第二次世界大戦後の資料収集と分析を行ったことが挙げられる。社会的意義については、移民の歴史が他府県に比べて身近な存在である沖縄において、聞き取りを継続していることにある。移民経験者の高齢化が進む中で人々の声を集めていくことは、社会に広く歴史を共有する上で極めて重要である。

研究成果の概要(英文)： This study clarified about the "Sokoku Fukki Undou (reversion movement to Japan under the U.S. military occupation)" seen in the Okinawa immigrant society in Argentina after World War II through historical archives and interviews. The following three points were mainly obtained during the research period.

1. Organized the process of formation in the Okinawa immigrant society leading up to the movement for reversion. 2. Proceeded with the collection of newspaper materials "La Plata Hochi" and the collection of materials describing Okinawa immigrant societies other than Argentina. 3. Conducted new interviews in Okinawa.

研究分野：移民研究

キーワード：沖縄移民 日本人移民 アルゼンチン 社会組織 復帰運動

1. 研究開始当初の背景

本研究は、第二次世界大戦後の南米アルゼンチンにおける沖縄移民社会にみられた「祖国復帰」をめぐる運動について、史資料及び聞き取りを通して明らかにするものであった。

第二次世界大戦後に「祖国日本」と切り離され米軍占領下に置かれた沖縄では、「祖国復帰」、すなわち日本への帰属を求める運動が展開された。こうした運動は、戦後も移民先国に滞在していた在外沖縄移民らによっても行われていたが、彼らの運動がいかなるものであったのかについては十分な研究がなされていない。そのため、本研究ではアルゼンチンで発行された新聞をはじめとする史資料と、現地の関係者への聞き取りを通して、アルゼンチンの沖縄移民社会における復帰運動について、沖縄との協働関係をも視野に入れながら明らかにすることを目指した。

沖縄移民に関する研究は、地理学の分野を中心に、戦前・戦後の移民の分布状況や仕事、生活などの情報が蓄積されてきた。また、1990年代以降は、移民した人々とその子孫が故郷沖縄に集う「世界のウチナーンチュ大会」の開催を契機として、移民に注目が集まるようになった。とりわけ移民先に現在みられる沖縄芸能や、沖縄にルーツを持つ者としての意識(「ウチナーンチュアイデンティティ」)が専ら研究対象になった。こうした傾向によって現在の移民社会に多くのスポットが当たる一方で、移民開始から100年以上、移民の歴史は移民史の記述に依ることが多く、史資料の発掘も必ずしも充分に行われてきたとはいえない。第二次世界大戦直後の移民社会に関する研究は、日本・沖縄への救援活動が盛んであったハワイを対象に主に行われてきたが、同様に戦争を体験した南米移民社会、とりわけアルゼンチンの沖縄移民社会の戦中・戦後については不明な点が多い。また、アルゼンチンにおける戦後の救済活動が、後に沖縄の「祖国復帰」をめぐる運動へとつながっていくのは重要な流れであるが、この点についても未だ論じられないままである。

本課題で扱う「復帰運動」とは、第二次世界大戦後の米軍占領下の沖縄で展開された、主権国家としての日本への帰属を求める運動である。1945年から始まるGHQ/SCAPによる日本の占領政策は、沖縄においては米軍による直接統治であり、1952年のサンフランシスコ講和条約によって日本が主権国家としての地位を取り戻した後も沖縄は米軍の占領下に置かれ続けた。1972年に日本復帰を迎えるまで日本本土と切り離された状態にあった沖縄では、米軍による様々な事件や政策により住民は抑圧的状况に苦しみ、平和憲法のもとで主権を回復した日本国へ「復帰」する希望を沖縄で醸成した。

しかし、なぜ沖縄から遠く離れたアルゼンチンで沖縄出身の移民たちは日本復帰を求めたのだろうか。連合国の一員であったアルゼンチンにおいては、枢軸国側にあった日本は第二次世界大戦後もなお敵性国家であった。「敵国」で生活する移民たちにとって日本の、ましてや米軍占領下にある沖縄の復帰運動を行うことは、自らのアルゼンチン国内における地位を脅かす恐れはなかったのだろうか。また、敗戦の日本の状況が少しずつ伝わる中、アルゼンチンでの永住を決めた移民が多くいた中で、なぜあえて沖縄の帰属について関わる必要があったのだろうか。復帰をめぐる運動について明らかにすることは、戦後の沖縄移民社会と沖縄との関係、及び故郷から離れた移民の意識を明らかにする上で極めて重要であることから本課題を設定した。

2. 研究の目的

アルゼンチンの沖縄移民社会における復帰運動を扱った研究はこれまでみられなかったため、本研究ではまず、以下の三点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 沖縄から最も遠い移民先の一つであるアルゼンチンで形成された移民社会において、どのような復帰運動が展開されたのか、復帰をめぐる展開された移民当事者らによる言説と、運動に至る経緯及び運動の内容を総体的に把握すること。
- (2) 沖縄に関する情報が決して多くは無かった移民社会において、移民たちは故郷の情報をどのように得、あるいは移民社会においていかに共有したのか、また、アルゼンチンにおける復帰運動はいかなる形で沖縄と連動したのか、その協働関係を明らかにすること。
- (3) 上記二点を明らかにすることで、移民社会における復帰運動の歴史的な側面だけでなく、在外移民の意識に目を向けること。沖縄の言語や芸能など、表象されるものに注目が集まりがちな今日的な移民研究の課題を、復帰運動を通して問い直すこと。

3. 研究の方法

本研究は申請者が所属する研究教育機関において主に実施した。本来であれば、所属機関での研究に加え、以下に述べるように国内外の調査が重要な位置を占めているが、本課題の期間中に

については外部で行う調査は新型コロナウイルス感染症の影響によって実質的に困難であった。本来であれば、国内では沖縄・東京を中心とした資料収集と聞き取り、また、アルゼンチンでの資料収集と聞き取りも欠かすことができない。資料の所在や調査先については以下を想定し研究を始めたが、移動を制限せざるを得なかったため、研究の方法は当初予定していた内容を以下のように変更した。

国内での研究活動については、これまで用いてきた資料を更に収集するため、沖縄県公文書館の移民関連資料、沖縄県内の各地域史編纂室・編集委員会等に保管されている史資料、外務省外交史料館、国立公文書館のアルゼンチン関係資料及び移民関係資料を再調査し、収集することを予定していた。しかし、国内の移動も制限されたことに加え、資料が保管されている各施設が閉館、人数制限、抽選式となるなど、新規の資料収集を行うことは困難であった。そのため、インターネットからの閲覧が可能な史料についての整理を行った。また、これまで収集した資料を改めて分析することにも注力した。

4. 研究成果

本研究課題の初年度においては、調査対象に関する新聞の収集・分析を中心に進めることで、アルゼンチンの沖縄移民社会における復帰運動の時系列を辿り、運動をめぐる諸活動及び移民社会の意識を把握することができた。一方で、現地調査については、聞き取り対象者が高齢化する中で喫緊の課題と考えていたが、全期間を通してアルゼンチンへの渡航はかなわなかった。

研究課題の最終年度については、途中より所属機関が調査地のひとつでもある沖縄に変更になったこともあり、沖縄県内での調査を進めることができた。特に、沖縄県立図書館に所蔵されている資料の一部については確認作業を行えたことは大きな収穫である。また、アルゼンチンに移民したのち沖縄に戻ってきた「アルゼンチン帰り」の方、数名に面会できたことも、遠方への調査がかなわない中で極めて大きな成果であった。感染予防に努めながらの面会であったため、繰り返し訪問することや長時間の滞在は控えざるをえなかったが、現在の状況が落ち着いたのちにあらためて聞き取り調査を行うことが可能となった。

先に述べたように当初は史資料の収集と現地調査を継続するとともに、研究成果をまとめる予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行によって大幅な変更を迫られたため、調査の実施については予定と変更せざるをえない状況が生じた。しかし、新規の調査に限られる中で、既に手元にある資料をあらためて分析することで得られた成果については学会で発表を行い、論文にもまとめたため、今後の研究につながる基盤を作ることができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 月野楓子	4. 巻 15
2. 論文標題 中南米地域の邦字新聞を活用した日本人移住に関する諸研究－『らぶらた報知』の創刊と「在亜沖縄県人連合会」の設立－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JICA横浜 海外移住資料館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 63-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 月野楓子
2. 発表標題 在亜沖縄移民社会における沖縄への意識 社会団体の形成と変遷から
3. 学会等名 日本移民学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------